

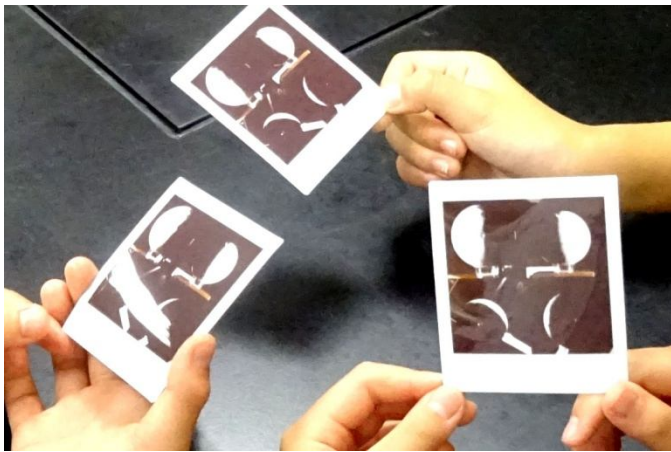
「チェキで”月”を撮る(4)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

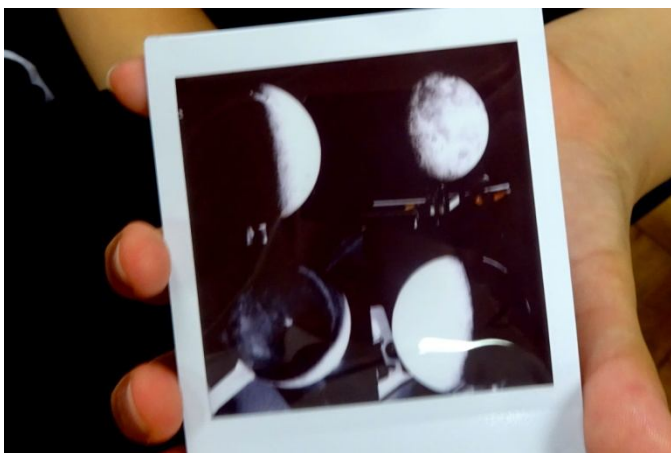
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

インスタントカメラ「デジタル・チェキ」には利点と欠点がある。利点は何とんでも、観察対象を撮影してその場でプリントし、ノート等に貼れる点だ。デジカメで撮ったものを、あとでプリントすれば同じなのだが、やはり次の授業の時に渡すことになる。また、その為には教師のひと手間が必要になる。デジタル・チェキを使えば、授業内に子どもたち自身で、作業は完了する。



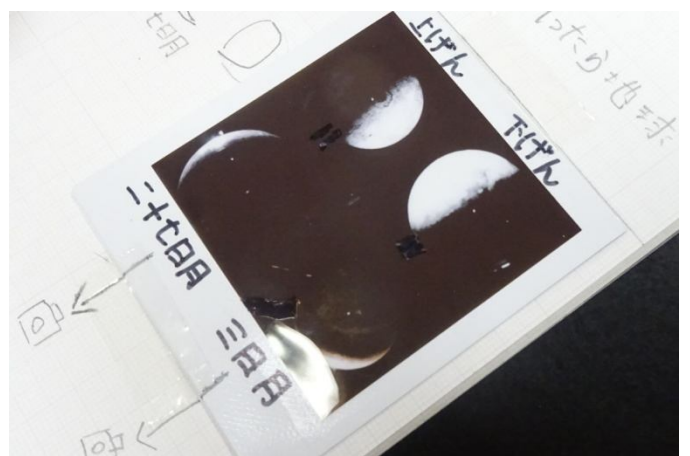
一方で最大の欠点は、コストだろう。専用のフィルムは10枚撮りで800円もする。そう簡単に使うことはできない。ここぞという場面だけ、それも「一人一枚だけ」慎重に使う必要がある。



しかし、「月の撮影」での使用効果は絶大だった。対象は月球儀なのだが、非常にリアルに撮れている。自分たちが観察して撮ったものが、その場でプリントされるのは、非常に学びを活性化させる。



プリントされたものは、セロテープや両面テープですぐにノートに貼ることができる。



写真の上下の余白には、ネームペンで説明を書くことも可能だ。この子どもの写真には、月の形の名称が書き込まれている。すべて形と名称が正しい組み合わせで書かれている。



デジタル・チェキでは、「単写真」「4分割」「9分割」などのプリント・モードがある。今回は研究班によって「4分割」か「9分割」を選択させた。4分割の場合は「1人1カット」だが、9分割の場合「1人2カット」だと、1カット余ってしまう。この班では、余ったカットに「集合写真」を入れている。